

現象学における自然の問題

——フッサールとハイデガーにおける自然と大地について——

金成祐人(帝京大学)

本発表の目的は、フッサールの『純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想』第二巻「構成についての現象学的諸研究」(以下『イデーニ II』と略記)および「自然の空間性の現象学的起源に関する基礎研究——コペルニクス説の転覆——」(以下「コペルニクス説の転覆」と略記)と、ハイデガーの『存在と時間』、形而上学期(1927-30)の諸テキスト、『芸術作品の根源』をはじめとする「大地(Erde)」をめぐる諸テキストを比較考察することを通じて、先行研究では十分に検討されていないと思われる自然の現象学におけるハイデガーの自然概念の位置づけを明らかにすることである。そのために、まずフッサール『イデーニ II』における自然の現象学とその問題について確認(1)、ハイデガーの『存在と時間』とその周辺講義での『イデーニ II』に対する批判のポイントおよび同書での自然概念を明らかにする(2)。そのうえで、ハイデガーの形而上学期における「全体における存在者(Das Seiende im Ganzen)」としての自然概念から、何かとして意味的に捉えられる以前の自然の実在性について検討する(3)。最後に、フッサール・ハイデガーの両者が、後に根源的自然を「大地(Erde)」という概念で展開したことに着目し、「コペルニクス説の転覆」とハイデガーの大地をめぐる諸テキストをもとに両者を比較検討し、現象学的自然概念の射程を明らかにする(4)。

1. 『イデーニ II』における自然の現象学

『イデーニ II』において自然は①物質的な自然、すなわち最も根底的で狭い意味での自然と、②有心的(animalisch)な自然すなわち広い意味の自然であり心を与えられ生化されて(beseelt)真の意味で「生きている」自然とに分けられ、有心的自然は物質的自然を下層として成立すると考えられている。そして、第三篇第三章の標題「自然主義的な世界に対する精神的世界の存在論的優位」が示す通り、第一篇と第二編で問題になった世界(自然)は、第三篇での主題である精神的世界に存在論的に先立たれる。「もし私たちがすべての精神を世界から抹消すれば、もはや自然は存在しない」(Hua IV, 297)と言われるように、フッサールが精神の自然に対する何らかの優位性を保持しているのは明らかである。しかしながら、自然を構成する精神には「自然の側面」(Hua IV, 279)があり、この自然は精神の基盤として働くと考えられ、構成以前のいわば原的自然が語られていることから、ここに循環があることが指摘されてきた。フッサール自身はこの循環ないし精神と自然の二元性がどのように解消されるのかを明らかにしておらず、現象学には自然をめぐる問題が残されているように思われる。

2. 『存在と時間』における自然の位置づけ

『存在と時間』でハイデガーは、「事象そのもの」の開示においていくらかでも前進しているなら、それを著者は誰よりもE・フッサールに負うものである」とし、初期フライブルク期に、「未発表の諸探究」を自由に閲覧させてもらったと告白しているが(SZ, 38, Anm.)、この「未発表の諸探究」が『イデーニ II』のことであるのはよく知られている。しかしながらハイデガーは、『イデーニ II』の分析の仕方に賛同しているわけではない。ハイデガーによれば、低次の層から高次の層まで分解して検討したのち、それを総括

するという仕方には問題がある。『存在と時間』では、このような組み立てをする際には組み立てられるべき世界の理解が先行していなければならない点に批判が向けられている(SZ, 99)。そのため『存在と時間』では、世界内存在という現存在の存在体制から出発しつつ、その等根源的な実存カテゴリーを解明するという手法が取られた。ここでは、自然も世界内部的存在者として、有意義性の指示連関のなかで分節化されたものとして捉えられ、意味的世界に先立つ自然の問題設定は見られない。

3. 形而上学期における意味的世界と自然の関係

『存在と時間』の自然は、世界内部的存在者として捉えられてきた。しかしながら、1928年のライブニッツ講義では、「自然の事実に眼前存在」が主題となるメタ存在論が論じられ、この自然(ピュシス)は「全体における存在者」として内世界性をもたないものと規定される。また、「現存在一般は身体性への、そしてそれとともに性別への事実に分散への内的可能性を有している」(GA26, 173)とも言われ、「全体における存在者」に投げ込まれている現存在の身体性が議論の俎上に載せられている。客観化作用や、分解と総括といった方法によってではないとしても、ここには意味的世界とそれに先行する自然の関係性という、フッサールが直面した問題との類似点が見出せるだろう。

4. 自然から大地への展開

メルロ＝ポンティは、『イデーニ II』では自然と精神の二元性が乗り越えられていないと考え、構成以前の原的自然の展開可能性を「コペルニクス説の転覆」の大地に見出す。「コペルニクス説の転覆」では、「大地(Erde)」は「根源的な住処」であり、「世界のアルケー」(323)とされる。

他方、ハイデガーは、全体における存在者としての自然(ピュシス)を、「人間が自らの住むことをその上に、そしてその内に基づけるもの」(GA5, 28)としての「大地(Erde)」へと展開する。大地は「本質的に自己閉鎖するもの」(GA5, 33)として、あらゆる解明を回避しつつ立ち現れるものを担うものである。

本発表では、こうした意味的世界に還元できない住処としての大地を、両者の自然の現象学の到達点として、その内実と射程を解明する。

【参考文献】

- Heidegger, M. (GA5): *Holzwege*, Gesamtausgabe Bd. 5, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1977.
- Heidegger, M. (GA26): *Metaphysische Anfangsgründe der Logik im Ausgang vom Leibniz*. Gesamtausgabe Bd. 26, 3. Aufl., Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 2007.
- Heidegger, M. (SZ): *Sein und Zeit*, Tübingen: Max Niemeyer, 19 Aufl., 2006.
- Husserl, E. (Hua IV): *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. Zweites Buch. Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution (hrsg. von M. Biemel), Haag: Nijhoff, 1952.
- Husserl, E., “Grundlegende Untersuchungen zum phänomenologischen Ursprung der Räumlichkeit der Natur”, *Philosophical Essays in Memory of Edmund Husserl* (Edited by Marvin Farber), Harvard University Press, 2014, S. 307-325.